

富士に祈る 76

國學院大學兼任講師 城崎 陽子

信仰と伝承 — 火祭り・その1 —

先回は、富士山の行事の中でも各講社で行われている七富士参りや登拝行を取り上げ、行事の様子を記した。今回は、「山仕舞い」を迎えた富士山麓の行事の中でも通称「吉田の火祭り」（以下、「火祭り」とする）と呼ばれる行事を取り上げて記す。

「火祭り」は、毎年八月二十六日と二十七日の二日間わたって行われる北口本宮富士浅間神社（以下「浅間神社」とする）が管掌する祭典である。行事は、神輿の渡御と神輿が「御旅所」（現在は上吉田コミュニティセンター）へ入った後、沿道に松明を立てて燃やす「火祭り」、そして、翌日の神

輿の還御とそれに付随する「すすき祭り」が重層しながら行われている。この重層性は、祭典の次第もさりながら、浅間神社と境内にある諏訪神社の御神体を拝戴した

「明神神輿」と、その「荒魂」を拝戴している「御山魂」（御影）神輿の二機が渡御することや、神輿渡御に際して上吉田の吉積山西念寺の住職が諏訪神社において「法楽」を行うことなどから、信仰的にも重層していることがわかる。

まずは二十六日の祭典から見てみたい。二十一日は、午後二時半から「手水の義」に続き、浅間神社本殿にて「本殿祭」が行われる。ここには、来

賓をはじめ、氏子総代、世話人、富士講の講員、各種団体の代表等が参列する。ちなみに、「世話人」は「火祭り」の一切の行事次第を滞りなく運営する世話役で、八月に入ると精進潔斎をして祭りに臨む。祭典は「修祓」

「宮司一拝」「開扉の儀」「献饌」「祝詞奏上」「玉串拝礼」「参列者玉串拝礼」「撤饌」の順に行われ、最後に社殿以下の境内の照明が落とされたなか、神職らによる「御絹垣」に囲まれ、「遷御の儀」が行われる。この時移されるのは御祭神である「浅間大神」（浅間神社の御祭神は三座であることから総称される）である。警蹕と共に「御絹垣」が移動し、拜殿向かって右手奥にある諏訪神社に遷御される。な



点火される大松明

お、「御絹垣」の様式になったのは、昭和五十年からで、それまでは「御袖垣」と言い、神職が斎服の袖で「御霊」を隠して移動していた。

諏訪神社では続いて諏訪神社祭が行われる。「開扉の儀」「献饌」「祝詞奏上」「玉串拝礼」等の祭典の中に平成二十三年ごろから西念寺住職の「法楽」が組み込まれている。これらの祭典が行われるのと並行するように子供神輿が発する。

この頃になると、二機の神輿を担ぐ「セコ」が境内に集合している。諏訪神社からの「遷御」が行われるといよいよ神輿が動く。しかし、そのまま渡御に移るのではなく、境内の「高天原」と呼ばれる御神木の間にある聖域に二機の神輿を据え、「発輿祭」が行われる。この祭典が終わると、「明神神輿」「御山神輿」の順に神輿の渡御が始まる。浅間神社の参道を下った神輿の行列は国道二三

八号線に出ると一旦右折して「新屋」地区との境まで向かい、再び浅間神社鳥居前を通過する。この時、西念寺の住職が上宿交差点のやや手前で読経しつつ通り過ぎる神輿行列の「御迎え」を行う。上宿交差点で一休みした神輿は、一息の上吉田の表通り（国道三一九号線）を下り、午後七時ごろ「御旅所」に入る。この時「明神神輿」は「御旅所」に張られた注連縄を神輿の頂上に据えられた鳳凰のくちばしで切り落していく。「御旅所」に据えられた二機の神輿は一晚をここで過ごす。「明神神輿」は浅間神社の神職が、「御山神輿」は御師団がそれぞれ交替で寝ずの番をする。

上吉田の裏通りや横道では、神輿の渡御に合わせて「井桁松明」が組まれる。また、神輿の通過とともに、表通りには「大松明」が次々と立てられる。そして、神輿が「御旅所」に到着すると、

世話人が御旅所前の「大松明」から点火を始めるのである。なお、上吉田で「大松明」に点火される頃、富士山の各山小屋でも「井桁松明」を燃やす。ちなみに、「大松明」は当年の三月には有志を募って本数が決められ、七月に入ると作り始められる。

大松明の点火を待っていたかのようにそれぞれの御師へ「坊入り」していた富士講の人々が通りへ出て大松明や井桁松明の前で御山に向かって「拝み」をあげる。「拝み」のスタイルは講社ごとで異なっており、立つたまま「拝み」を行う講社もあれば、莫座などを敷いて座って「拝み」を行う講社や、「お焚き上げ」をする講社もある。また、「拝み」の後、「数珠」や「御伝」で身体を撫でて身体健全の祈禱を行う場合もある。さらに、「お焚き上げ」の火壇とした塩による「塩

加持」が行われたりする。なお、年々「火祭り」に参加する講社の数は減っている。平成二十八年には秩父・大丸正講（当年に解散したとも）や東京・丸藤宮元講は参加していなかった。

富士吉田の御師・菊田式部（名は広道、号は北麓斎・穂並）が綴った『菊田日記』（享和三年へ一八〇三）から天保六年へ一八三五）に至る三十三年間の日記）には、「火祭り」は七月二十一日、二十二日の「神事」として登場する。その中で、「御旅所」は「明神雨屋」などとも記されている。諏訪神社を含めた祭事に「コノハナサクヤヒメの火中出生譚」が伝承として習合され、現在の「火祭り」が形成されていったことが推測される。「火祭り」は極端に穢れを嫌い、身内に不幸のあった家は神輿を見ることも許されないうえ、「逃げる」と言い祭事の期間中は他所へ移る習俗がある。

民間伝承にジャータカ物語



絵・橋本豊治

佛の傳説にジャータカ物語は 41 句・菅谷秀文

仏陀を讃嘆する文字「讚仏乘ジャータカ（本生譚）」偉大な釈尊を仏と崇め、更に実在した釈尊を理想化する中で、ブッダの超人的な働きを讃える文字が誕生した。

捨身飼虎 崖下の飢えた虎に身を投げて、自らを布施した前世の釈尊を描く。

前世 仙人や動物であった時、自らが犠牲となり善行を行う。火の焔に自らの身を投げ入れ、飢えた人に食べさせてもらうとする。現世で釈尊に生まれブッダとなる。

○ジャータカは、民衆に対して仏教を普及する役目を担った。